

つやまっ子に贈る100冊の本

わくわくドキドキの

冒険の世界

推薦者

松岡 雅子さん
(上河原)



わたしが小学1年生の時、担任の先生が毎日1章ずつ読んでくれた『エルマーのぼうけん』。

チューイングガムに棒付きキャンディー、輪ゴムや長靴など、いくつかの道具をリュックに入れ、どうぶつ島にりゅうの子を助けにいったエルマーは、その道具と知恵で次々とピンチを切り抜けていきます。

あの時感じたわくわくドキドキ感を子どもたちにも感じてほしくて、夜寝る前に少しずつ読み聞かせしました。わたしが楽しみながら

読み聞かせると、子どもたちも喜んで聞いてくれました。

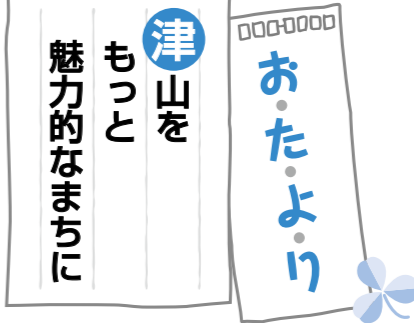
「読み聞かせは子どもにいいから」などの義務感ではなく、子どもと一緒に本の世界に浸り、純粋に作品を楽しむことができればいいですね。『エルマーのぼうけん』は親子で楽しめる、読み聞かせにお薦めの作品ですよ。



「エルマーのぼうけん」

ルース・スタイルス・ガネット 作
ルース・クリスマン・ガネット 絵
渡辺 茂男 訳
(福音館書店)

つやまっ子読書プランキャラクター「ぶっくちゃん」



●広報つやま1月号に「地域ブランドと観光振興」というテーマで特集があり、津山は歴史・文化・史跡でもって観光立脚すべきとの提言がありました。

そこでもう1件、識者の見方による津山情報を紹介したいと思います。それは司馬遼太郎と林屋辰三郎の対談『歴史の夜咄』（小学館文庫）の中の「一宮の中山神社、総社もある。それ

●1月号の広報、じっくり読みました。多くの人に「津山っていいところ」と思ってもらい、リピーターになってもらえることを願います。このままではまだリピーターは根付かないと思うので頑張らないといけませんね。(西吉田・女性)

●まちづくりは人づくり。郷土に關係のある人をつないで、まちの活性化や雇用の受け皿づくりをしてほしい。このまちが好きな人を増やしていくことが大切です。(中島・男性)

に国分寺から安国寺があるといった具合で古代から近世にいたるすべてがこれほどそろった地は珍しい。いわば津山は一つの歴史がセットされたところだ。(中略)歴史の価値があります」という記述です。津山には弥生住居址群から戦国時代の岩屋城跡、江戸時代の城下町、大正時代の建物などもあります。津山洋学資料館を中心に据えて、この豊富な歴史的価値をアピールする方法を考えてみてはどうでしょうか。(川崎・男性)

きらめく津山人

もつと津山を知ってほしい

津山おくにじまん研究会代表

末澤 敏男さん(河辺)



ふるさと津山の歴史・風土・文化などを幅広く研究し、よりよいまちづくりを目指す「津山おくにじまん研究会」。代表の末澤さんにボランティアガイドを通して感じる思いを伺いました。

どんな活動をしていますか？

現在、仕事をリタイアした人を中心に21人の会員がいます。津山の歴史や風土、文化を知ることで、郷土の本当の姿や誇るべき津山の良さを再確認するための郷土史の研究や現地研修などを行っています。さらに津山市観光協会からの要請で、ほかのボランティアガイド団体とも

協力し合い、津山城（鶴山公園）、衆楽園、城東地区などでボランティアガイドとして活動しています。

活動に参加したきっかけは？

わたしは若いころから、いろいろな歴史を調べるのが好きで、津山郷土史懇話会に入会していました。退職後は、津山市シルバー人材センターに文化財の発掘調査と観光ガイドを希望して入会しました。そこで観光ガイドの研修を担当する「津山おくにじまん研究会」を知り、参加するようになったのです。

ボランティアガイドとして活動してみると、改めてわたしは人とのふれあいが好きなんだと感じています。ガイドは自分のまちの歴史を知っていないければなりません。それ以前に、遠方から津山に来られた観光客の人たちに「ようこそいらっしやいました」と思える「おもてなしの心」がないと務まりません。

ガイドは津山を訪れた観光客が最初に接する地元の人です。日々「わたしたちは津山の代表なんだ」という思いを持ちながら、観光客に接しています。

気をつけていることは？

津山にはさまざまな観光客が訪れます。バスツアーなどで滞在時間が短い場合には簡素だけど分かりやすい案内を、少人数で津山の史跡や歴史をじっくりと見てみたいという人には、より詳しく掘り下げた案内をするようにしています。どちらにしても、こちらからの押し付けにならないよう気をつけて、相手がどのような希望を持っているのかを見極めることが大切だと思います。

また、どこから観光に来られたかを事前に把握して、その歴史を勉強しておくことも大切です。何か共通点や歴史的なつながりがあれば、それを話題にすることもできます。そうすると、とても興味を持って聞いてもらえますね。

例えば、大阪から来た観光客には「大阪城の天守閣前にある大砲は津山藩で作られたもので、明治時代には正午の時報として号砲をとどろかせていました。」



▲津山城で観光案内をする末澤さん

そこから「半ドン」（お昼から休みの意）という言葉が生まれたのですよ」といった具合に。それは面白い話ですね。これらの課題や活動は？

後継者の確保と育成が重要な課題です。歴史に興味があり、人とふれあうことが好きな人は気軽にこの活動に参加してほしいですね。

地域おこしはみんなで汗をかいてこそ意味があるものだと思います。この活動を通じて津山のことをもっと皆さんに知ってもらいたいのですし、郷土を愛する人を増やすことができればと思っています。

「津山を訪れる人に夢を与えることが楽しい。楽しいと思える心を持つことが大切」と語る末澤さん。観光シーズンを間近に控え、忙しくなりますね